

平成30年度天皇杯受賞者受賞理由概要
農産・蚕糸部門

高度な水稲直播技術と徹底したコスト低減による高収益家族経営の実践

○氏名又は名称 佐藤 忠美

○所在地 北海道雨竜郡妹背牛町

○出品財 経営（水稲・秋小麦）

○受賞理由

・地域の概要

妹背牛町は北海道の札幌市と旭川市の間に位置し、石狩川、雨竜川の豊富な水資源に恵まれた、平坦な水田畑地が広がる道内でも有数の水稲産地である。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

水稲と秋播小麦を主体とした約40ha（平成29年）の規模で家族3名を基本とした経営である。栽培期間が限られる北海道の厳しい環境の中、水稲直播栽培と田畑輪換による小麦栽培を導入し、ほ場ごとに管理方法を変えながら、低コスト、高品質、省力栽培による高収益経営を実現している。

・受賞者の特色

（1）高い技術力に裏付けされた水稲直播技術の実践

水稲栽培において、直播栽培は移植栽培に比較して、大幅な作業の省力化が出来るが、収量の確保が難しい問題がある。佐藤氏は、栽培期間が限られ、気象条件のリスクが高くなる北海道の厳しい条件下で、直播栽培を導入し、高い収量につながる高度で独自の栽培技術を自ら試行錯誤のうえ習得し、ほ場ごとのきめ細やかな栽培管理を行うことで、北海道10a当たりの平均収量を約120kgも上回る収量を確保し、さらには北海道の生産費の平均と比較して約2割の生産費削減を実現しており、北海道でトップクラスの高収益経営を実践している。また、田畑輪換による小麦栽培では、自作のコンビネーション播種機により出芽率を上げ、水稲と同様にほ場ごとのきめ細やかな栽培管理を行い高収量を確保している。以上のシステムは、佐藤氏が過去の栽培データに基づき確立したものである。

（2）技術の普及、経営の知識伝達とその取り組み

佐藤氏は、「妹背牛町水稲直播研究会」を立ち上げ、長年培った水稲直播技術やその成果を惜しむことなく地域の農家に伝えるとともに、自らと地域の直播技術の向上を図り、省力、高品質、低コスト化による地域の経営改善に取り組んでいる。

（3）女性の活躍

経営では、(株)佐藤農場として、平成29年に法人化し、社員として妻の聖子氏、四女の亜紀氏を雇用している。聖子氏、亜紀氏ともに、農業機械のオペレーターとして水稲移植栽培や小麦の栽培など、全体の作業を実施し、経営に参画している。

・普及性と今後の発展方向

直播栽培技術をより高度化し、今後も消費者ニーズに対応する高品質な作物の生産性の向上や省力・高収量による経営の高収益化を目指す意向である。さらに地域の担い手への技術や経営管理の伝達を通じて自分だけではない、地域、北海道全体の農業が良くなるように取り組みを進めていくこととしている。

平成30年度天皇杯受賞者受賞理由概要
園芸部門

地元企業と連携した養液栽培の研究活動により、販売額を大幅に増加

○氏名又は名称 JA豊橋トマト部会（代表 大竹 浩史）

○所在地 愛知県豊橋市

○出品財 経営（トマト）

○受賞理由

・地域の概要

豊橋市は愛知県の東南部に位置し、温暖な気候に恵まれ、砂質土壌で覆われた排水性のよい沖積平野と粘性が高く保水性のよい洪積台地で形成されており、多様な農畜産物が生産される全国有数の農業地帯である。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

豊橋市では平成10年頃までトマトとメロンなどの高級果実を組み合わせた生産が行われていたが、高級果実の価格低迷が続いたことから、当部会は、産地の生産基盤維持を図るため、土壌病害の回避等により収益性が向上できるトマトの養液栽培に着目。平成15年に養液栽培研究会を結成するなどして養液栽培の普及と技術改良に取り組んだ結果、現在の導入割合は6割を超え、非常に高い水準となっている。

当部会の会員戸数は149戸、トマトの生産量は7,603t（県内シェア38%）で、養液栽培の導入以降、部会の販売額は大幅に増加している。

・受賞者の特色

（1）研究会活動を通じた生産性向上の取組

部会員81戸が参加する養液栽培研究会では、地元企業と連携して養液栽培に関する技術開発を行うとともに、開発した技術を部会内に共有して普及を図ることで、部会全体での生産性向上に取り組んでいる。

（具体的な取組内容）

① 導入コストが低減可能なヤシ殻を利用した培地や、ハウス内の炭酸ガス濃度や湿度等の最適化により収量が増加する環境制御装置を共同開発。

② 養液栽培システムの導入に当たり、部会員が協力して自己施工を行うことで設置コストの低減を図るとともに、新規導入者に管理方法等の技術を伝達。

（2）ブランド化等の販売拡大の取組

市場調査により消費者・実需者のニーズを的確に把握して、糖度等が異なる4種類のトマトのブランド化、ニッチ市場向けの加熱用トマト品種の栽培等に取り組み、安定的な販路・収入の確保を実現している。

・普及性と今後の発展方向

地元企業と連携した研究活動によって先進技術を開発・導入して生産性を向上させた取組は、他産地の模範となるものである。また、開発された技術は、愛知県が推進する「あいち型植物工場」にも取り入れられ、県下全域で普及している。

今後は、研究活動を継続してより一層の生産性向上に取り組み、トマトの一大供給産地として、更なる発展を目指す。

平成30年度天皇杯受賞者受賞理由概要
畜産部門

高品質な生乳・堆肥生産に立脚した「質で勝負」の高収益酪農経営

○氏名又は名称 内ヶ島 賢勇・内ヶ島 美津代

○所在地 熊本県山鹿市

○出品財 経営（酪農）

○受賞理由

・地域の概要

山鹿市は熊本県の北部内陸部に位置し、酪農は戸数34戸（経産牛は約2千頭）で、県内市町村別の規模では菊池市、合志市に次ぐ酪農地域である。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

内ヶ島賢勇氏は、昭和63年に就農し、平成9年に経営移譲をされた就農2代目の酪農経営者。平成17年に（有）茶ノ木を設立して経営の高度化を図り、翌年にはフリーバーン・パーラー方式の牛舎を新築して今に至る。経営は夫妻と長男夫妻の4名を主体に、両親が随時手伝う形の家族労働力6名で、経産牛78頭と未經産牛32頭を飼養している。高泌乳を追い求めず、牛群の繁殖状況と乳生産のバランスを考慮した飼料設計、暑熱対策、衛生的な搾乳作業など、牛のことを一番に考えた「質で勝負」の経営を実践している。

・受賞者の特色

（1）高品質な生乳・堆肥生産に立脚したゆとりある高収益経営

- ① 乳脂率4.08%、無脂固形分率8.91%、体細胞数9.6万個と高品質な生乳を安定的に生産しており、九州生乳販連生乳品質共励会において5年連続で優秀賞以上を受賞。このため、生乳1kg当たり単価は県平均より約3円高く、高収益性を実現。
- ② 堆肥生産技術は、県のコンクールで「堆肥の達人」に認定されるほど優秀。堆肥を飼料畑への還元や牛床の敷料として利用。
- ③ 哺乳ロボットを活用した労力軽減、月2回程度のヘルパー利用も組み合わせ、労働時間1日1人当たり7.1時間のゆとりある経営を実現。

（2）女性の活躍

美津代氏と長男の妻の2人は、主に搾乳、哺育、生乳生産管理の作業を行い、飼料収穫の繁忙期にはトラクターやダンプの運転もこなしている。また、美津代氏は、小学校での食育講座や酪農女性部での活動に取り組むなど、地域や産業振興のために活躍している。

・普及性と今後の発展方向

飼料の成分バランスを考慮した飼料設計、良質な戻し堆肥の敷料利用、推奨される搾乳手順を遵守した乳房炎コントロールなど、飼養技術は地域の酪農家の模範となっており、堅実でゆとりある経営モデルとして普及性が高く期待できる。

平成30年度天皇杯受賞者受賞理由概要
林産部門

環境配慮型の森林づくりを実践する日本有数の林業家

○氏名又は名称 速水 亨・速水 紫乃

○所在地 三重県北牟婁郡紀北町

○出品財 経営（林業）

○受賞理由

・地域の概要

紀北町は、三重県南部の海沿いの町である。西北部一帯は日本有数の原生林が残る大台山系に連なる急峻な山々に囲まれ、平地は極めて少ない。年間降水量約4,000mmという日本でも有数の多雨気候の中にあつて、地域林業は、密植、除間伐、枝打の繰り返しによる良質芯持ち柱材の生産を特徴としている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

速水氏は、速水林業の9代目代表であり、自己所有山林に経営を受託する森林を加え、1,189.3haを対象に森林経営計画を樹立し、地域ブランドである高品質の「尾鷲ヒノキ」材を生産している。

・受賞者の特色

(1) 日本で初めてのFSC認証取得

速水林業は持続可能な森林経営の確立を目標としているが、その内容は、生物の多様性を創出・維持しつつ人工林を育成するというものである。

平成12年には、環境配慮型林業の国際的基準を持つFSC認証を日本で最初に取り得し、その後の国内における森林認証の普及に大きく貢献している。

(2) 高性能林業機械の導入による生産性の向上

環境配慮型森林経営の持続には、林業生産において、ヨーロッパレベルの機械化が不可欠であると考え、平成2年に高性能林業機械であるタワーヤーダを日本で初めて導入した。その後も、他の林業機械との組み合わせによる搬出システムを独自に開発するなど、間伐、皆伐の生産性向上を実現した。

(3) 育林の低コスト化

木材生産経費の7割を占める初期コストの低減を目的に、ポット苗生産技術の確立や選抜育種による大型苗の確保・植栽と、下刈り回数の減少等に取り組み、30年生までのha当たり育林労働投下を、それまでの400人工（作業に要する延べ人数）以上から、90人工台まで大きく引き下げることに成功している。

・普及性と今後の発展方向

速水氏は、作業の効率化やコスト削減、市場開拓等の経済性を追求するとともに、その成果を多方面に普及啓発する活動を行ってきた日本有数の林業家である。

氏の環境配慮型森林経営は、森林所有者による経営の持続を可能にするとともに、林業が産業として自立することを目指したものであり、その追求は今後も継続されると考えられる。

平成30年度天皇杯受賞者受賞理由概要
水産部門

いわし削り節の継承とだし文化の普及

○氏名又は名称 有限会社西尾商店（代表 西尾 公伸）

○所在地 静岡県静岡市

○出品財産物（水産加工品）

○受賞理由

・地域の概要

蒲原（かんばら）は、江戸時代に整備された東海道五十三次にある第15番目の宿場町であり、平成18年の編入合併により静岡市清水区の一部となり、新幹線や在来線、高速道路や国道が通る東西交通の要衝となっている。

県内は水産加工業が盛んで、カツオ、サバの節製品、沼津の干物、西駿河湾から遠州灘にかけてシラス煮干し、焼津市を始め静岡市清水区、沼津市など大漁港周辺では名物「黒はんぺん」等の水産物の特産品が多い。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

受賞者は、明治39年の創業以来、いわし削り節を始め、様々な削り節を製造し、販売してきたところである。現在は、安定、味、安心の3点を経営の柱として、鰹の本枯節や本節、いわし節、利尻・羅臼昆布等様々な食材を調合しながら顧客の要望に合わせた削り節を販売展開している。5年前からはインターネット時代にマッチした販売展開も行い、これまで培ってきた技術力や素材へのこだわりを武器に、一般消費者に向けた商品づくりにも力を注いでいる。

・受賞財の特色

いわし削り節の原料のカタクチイワシやウルメイワシの煮干しは、削り節に最適な品質のものを時期及び地域等を厳選して確保している。削り節に切削する工程では独自開発の機器の導入や切削機の刃を原料や天候等を考慮しながら1日に数回調整して、原料をより薄く、また、均一に削り出すような工夫を施しており、これによりふんわりとした食感と良好な旨みと風味を損なわない加工を実現しており、年間を通じて良質で安定した品質の削り節を生産している。

また、一般の消費者向けに「だしの魅力を伝えるスクールスタイルの体験プログラム」（だしの学校）を実施するなど、ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食」の基本であるだし文化やその良さを広く発信する取組を行っている。

・普及性と今後の発展方向

いわし削り節は、静岡では静岡おでんや富士宮やきそば等のトッピングとして欠かせないものであり、蒲原やその周辺地域ではお浸しやおにぎり、ご飯のふりかけなど、毎日食べるごはんやおかずのトッピングとして100年経った今も庶民に愛されている。受賞者は今後も蒲原のいわし削り節の文化を守り、現在の製品のクオリティーを維持しつつ、更なるこだわりを持った製品開発、商品作りに取り組んでいくことが見込まれる。また、広く消費者に我が国の誇るべき食文化であるだしの普及活動を行っていくことが期待できる。

平成30年度天皇杯受賞者受賞理由概要
多角化経営部門

九条ねぎ需要開拓による農業活性化

○氏名又は名称 こと京都株式会社（代表 山田 敏之）

○所在地 京都府京都市

○出品財 経営（ねぎ）

○受賞理由

・地域の概要

京都市は、京都府南部に位置する府内最大の都市で、夏に雨が多く冬に少ないという気候と、三方を山に囲まれた地理的状況から、昼と夜との寒暖の差が大きいという特徴を有している。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

山田氏は、33歳でUターン就農し少量多品目栽培による家族農業を営んでいたが、平成9年に京野菜のなかでも周年栽培可能な「九条ねぎ」に絞った経営に転換するとともに、その後、カット加工に取り組み、販路の開拓に尽力した。現在は、ねぎ等の生産を行う農産部や加工部等の4部門を組織し、常時雇用49名を含む従業員150名の経営体へと成長している。

・受賞者の特色

（1）需要に応じた加工体制強化による収益向上

取引先の要望等に応じ0.1mm単位でカット幅を調整できる機械を導入することで商工系カット業者には真似のできない加工を実現するとともに、乾燥ねぎや料理店のシェフと提携したねぎ油等の付加価値のある加工生産に取り組んでいる。

（2）生産者の組織化

こと京都では、ねぎ生産者団体「ことねぎ会」を立ち上げ、会員生産農家が策定した生産計画を基に契約を結び周年安定供給を目指すとともに、地域農業の振興にも寄与している。

（3）安定的な農業経営の実現

山田氏の農業経営では科学的な経営管理を取り入れており、PDCAを実践し続けることで企業としての持続的成長を実現している。また、GAP認証取得、HACCP管理に対応する大型加工場の設立等、安全・安心な供給体制整備に取り組んでいる。

（4）人材育成及び女性の活躍

こと京都では、新規就農者等を対象に「独立支援研修生制度」を設け、栽培技術だけでなく「農業経営者」としての育成に取り組んでいる。また、女性社員の管理職への登用等、あらゆる場面で女性の活躍推進を実践している。

・普及性と今後の発展方向

九条ねぎの需要開拓により、京都府内の九条ねぎの生産活性化に貢献している。今後とも、会員増強による生産の拡大、農家の収入安定化、地元雇用創出等、多角化経営のモデルケースとしての発展が期待される。

平成30年度天皇杯受賞者受賞理由概要
むらづくり部門

伝統的な農村景観の保全と活用をめざしたむらづくり

○集団等の名称 本寺地区地域づくり推進協議会（代表 佐々木 勝志）

○所在地 岩手県一関市

○受賞理由

・地域の沿革と概要

一関市は、盛岡市と宮城県仙台市の間地点に位置し、高速道路と新幹線の高速交通網が備わるなど立地的には恵まれた条件にあり、観光資源も豊かな地域である。本寺地区は、市街地から西方に約20km離れた山間に位置し、かつて「骨寺村」と呼ばれた中尊寺の経蔵別当の荘園があった。7つの集落により構成され、山に囲まれた平坦地には、水田を中心とした耕地が広がる典型的な中山間地域である。

・むらづくり組織の概要

- ① 平成15年度に、「平泉の文化遺産」の推薦遺産に骨寺村荘園遺跡が追加されたことを契機に、全戸加入による「本寺地区地域づくり推進協議会」を設立し、荘園遺跡と共存する活力ある地域づくりに取り組み始めた。
- ② 本協議会には、地区農業全般を担当する営農部会、景観保全型ほ場整備を担当する基盤整備部会、景観を生かした地域おこしを担当する地域おこし部会の3つの部会を置き、さらに平成16年度から岩手大学が加わり活発な活動を展開している。
- ③ 平成18年度には、郷土料理レストラン、産直コーナーの開設に関する計画を作り、女性部会を新設した。

・むらづくりの取組概要

(1) 農業生産面

- ① 荘園景観の保全と農地整備を両立させ、生産性の向上を図り、自然乾燥等にこだわった「骨寺村荘園米」としてブランド化に取り組んでいるほか、骨寺荘園米オーナー制度を創設し、販路の拡大と収益性の向上を図っている。
- ② 日本在来の鶴首カボチャの一種で糖度の高い「南部一郎カボチャ」の特産化に取り組み、年間10トンを生産。形の良い7割は生食向け、その他はペースト等に加工し、大手百貨店の通信販売等で販売している。
- ③ 平成23年度に設置した「骨寺村荘園交流館」には、郷土料理レストラン、産直コーナーを併設し、女性部会会員が運営に関わっており、女性の所得向上とともに、地域経済の活性化を図っている。

(2) 生活・環境整備面

- ① 中世から続く農村景観を守り伝えていくため、土水路の維持管理について、建設業の関連団体と協定を結び、地域住民とともに、年2回の泥上げを実施している。
- ② 骨寺村荘園交流館を活動拠点として、季節ごとに地域行事を行い、住民同士の交流を積極的に行うほか、大学生等との都市農村交流活動、教育旅行の受け入れ、伝統行事である中尊寺への米納めの復活や伝統芸能「鶏舞」の伝承活動などに取り組んでいる。
- ③ 中学生を対象に、骨寺村荘園遺跡のボランティアガイドの養成事業を開始するなど、将来故郷への誇りを持ち、定住することを期待する取組を行っている。

・他地域への普及性と今後の発展方向

本取組は、中世から続く農村景観を守り続けていくため、曲がりくねった土水路・畦畔を残す景観保全を重視した農地での水田農業を継続できる仕組みづくり、特産作物の生産や女性を主体とした6次産業化の取組に加え、都市農村交流活動等に取り組んでいる事例であり、今後の発展が大きく期待できる。

伝統的な農村景観の保存を目指し、地域住民が地域に誇りを持ち、地域外のサポーターを巻き込みながら活動する取組は、全国におけるむらづくりのモデル事例になり得るものである。